

では、**マタイの福音書 7 章 15 節**から見て参ります。イエス・キリストのなされた説教の中でも最大のものと言って良いと思います。山上の説教、山上の垂訓。**ヨハネの 13 章**からオリブ山の講話というのもあるんですが、そのメッセージとほぼ同じくらい有名なもので、また私たち以外にも、クリスチャンでなくても、ここに書かれている聖句は慣用句ともなって、また日本語の中にも多く浸透しているものが見受けられます。豚に真珠、狭き門、そして今晚テキストにしているところには、羊の皮を被った狼といった言葉。そしてこの山上の説教の結論部分に見られる、砂の上に建てた家は嵐が来ると、暴風雨が吹くと瞬時に倒れてしまう。それは砂上の楼閣という言葉としても知られております。ですから、一般の人にとってもイエスのこの山上の説教は非常に身近なものと言えらると思います。但し、その意味は正しくは受け止められていない感があります。

で、早速 **15 節**を見て頂くとその羊の皮を被った狼についてイエス・キリストが教えられております。『**にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。**』羊の皮を被った狼、慣用句です。聖書を読んだことのない人も聞いたことのある言葉です。おとなしそうにしていながら、親切そうに見せながら、優しい男のように見せながら、良い人に思わせながら、ある時に凶暴化する。豹変してその本性を現したりする。そういう時によく使うわけです。特に女性に対して性行為を強要するような、そういう可能性のある男性のことを羊の皮を被った狼とか。または、車のマニアでは、かつてのスカイラインは羊の皮を被った狼みたいな、そういうふうに言われた時代もありました。それはそれとして、あまり正しい理解はなされていないようです。この慣用句の意味合いとしては、人は見かけによらぬものとか、外見に騙されてはいけないというような意味合いでよく使われるわけです。

で、イソップ寓話でもこの山上の説教から、羊の皮を被った狼という寓話が有名であります。ある時狼がたらふく餌にありつくために、姿から、外見から入って本性を変えるのが良いと考え、そして羊の皮を被るとまんまと羊の群れの中に入ることが出来、羊飼いやすら欺くことが出来、そしてその羊の群れに混じって、まんまと自分の腹を満たしていたわけです。ところが夜になってこの羊の皮を被った狼も他の羊たちも皆囲いの中に入れて、そして入り口も鍵でしっかりと閉められてしまったわけです。その晩どういうわけか羊飼いは無性に羊が食べたくなくて、お腹が空いたので羊を 1 頭屠ろうということになりました。その群れの中で最も大きな、最も丸々太った美味しそうな羊を選んで、そしてそれを屠殺したわけです。で、その大きな羊と思われたのが狼だったという皮肉な話なんですけれども、羊の皮を被った狼というものは最終的には羊飼いによって取り扱われるということを知らなくてははいけません。羊の皮を被った狼というのはもちろん貪欲な狼と呼ばれて、偽預言者とイエス・キリストが名指しにしているものであります。イエスこそ良い牧者、大牧者、私たちの羊飼いであります。羊の皮を被った狼が時折、羊の群れの中に変装して紛れ込んでくることはありますが、でも最終的には羊飼いによってこの狼は取り扱われるということです。

で、**第 2 コリント 11 : 13～15** もここで参照して頂きたいと思います。ここに言及されているのはコリントの教会の中に入ってきた羊の皮を被った狼たちのことです。『¹³ こういう者たちは、にせ使徒であり、人を欺く働き人であって、キリストの使徒に変装しているのです。¹⁴ しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。¹⁵ ですから、サタンの手下どもが義のしもべに変装したとしても、格別なことはありません。彼らの最後はそのしわざにふさわしいものとなります。』“彼らの最後はそのしわざにふさわしいものとなる”と。イソップ寓話でも言われてました。最後は羊飼いによって殺される、滅ぼされるということです。ただ、サタンは元々光の天使でした。ルシファーと呼ばれていたわけです。天

におけるワーシップ・リーダー、聖歌隊のリーダーだったわけです。その彼はいくらでも自らを変装して、そして教会でワーシップの奉仕なんかして見せるわけです。本物っぽく見えるわけです。“義のしもべ”という言葉が**15節**に使われています。サタンのしもべと呼ばれていますが、そのしもべという言葉は英語の聖書では「ミニスター」”minister”と訳されています。“ミニスター”は「しもべ」という意味ですけれども、専門用語で聖職者のことを指す言葉です。ですから、義の聖職者。プロテスタントでは聖職者という言葉よりも教役者という言葉で専門用語として使います。牧師とか教会の指導者のことを指す言葉です。もともとは「しもべ、仕える者」という意味ですけれども、“ミニスター”はもう専門用語として教会で使われます。まるで光の御使いのように見える。まるで本物のように見える偽物ということです。この人は見た目は明らかに怪しいというような人は、すぐバレますから、ある意味でそういう人は除外してもいいかもしれません。偽牧師、これはまた実に本物っぽく見えるわけです。偽物っぽく見えるのは、まだいいかと思います。でも、むしろ本物っぽく見えるのが危険であるということです。どうやって彼らの変装を見破ることが出来るのでしょうか。2つあります。

一つは**使徒 20:29~30**です。パウロがエペソの教会の指導者たちに対して最後のお別れのメッセージをします。Farewell message をするわけです。その際に警告を与えています。『**29**私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中にはいり込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。(この凶暴な狼とは、イエスが言われた羊の皮を被った狼ということです。つまり、偽預言者、偽使徒、偽働き人、偽牧者、偽宣教師といった人たち。)³⁰あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。』彼らは他所からやって来るだけじゃなくて、教会の中からも現われてくる。曲者です。曲者だから曲がったことを言うんですが、ここで偽物をどうやって見分けるのか、その変装を見破ることが出来るのか。**30節**の後半の言葉が鍵となります。『弟子たちを自分のほうに引き込もうとする』イエス・キリストの方ではなくて、自分の方に引き込もうとする。これが一つの特徴です。偽牧師の特徴は、イエスの方ではなくて、自分の方に引き込もうとする。これによって見分けて頂きたいと思います。

2番めは**第2ペテロ 2:1~3**に見ることが出来ます。『**1**しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも(ローマの教会のことです。)、にせ教師が現われるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。²そして、多くの者が彼らの好色にならない、そのために真理の道がそしりを受けるのです。³また彼らは、食欲なので、作り事のことばをもってあなたがたを食べ物にします。彼らに対するさばきは、昔から怠りなく行なわれており、彼らが滅ぼされないままにいることはありません。』彼らは滅ぼされないままにいることはないというのは、慰めであり、また希望であります。だから恐れるに足らないのですけれども、ただ注意が必要です。食べ物にされる前に見破る必要があります。この偽教師、偽牧者たちは、あなたには、羊たちには食べ物を与えず、あなたを食べ物にする。これが特徴です。羊は牧草を食べますが、羊の皮を被った狼は牧草を食べません。何を食べるかによって見分けることが出来ます。あなたに御言葉の食物を与えないで、この偽牧師はあなた自身を食べ物にするということです。あなたの懐が目当てです。あなたの労働力が目当てです。タダ働きさせて、自分の思うように、自分の女中のように、自分の小間使のように、自分の奴隷のように、タダ働きをさせます。そして私腹を肥やすわけです。

光の御使いに変装するようなサタンのしもべをどうやって見分けるのか。一つは、**使徒の 20章**に見られたように、イエスの方ではなくて自分の方に引き込もうとするならば、怪しいということです。で、もう一つは**第2ペテロの 2章**にありましたように、教会に集まる羊たちに御言葉の食べ物を与えないで、羊自身を食べ物にしていく。何を食べるかによって見分けることが出来るということです。

また、12使徒の教訓。ギリシャ語で“ディダケー”という使徒教父文書があります。これも非常に有益な資料ですので、ちょうど新約聖書の同時代に書かれた使徒教父文書。その中に12使徒の教訓。“ディダケー”というのは「教え」という意味です。成立年代はAD50～70年という新約聖書とほとんど同じ時期に成立したものです。その中に、『巡回伝道者がもし三日あなたの家に留まるようならば、その人は偽預言者である。パンだけではなくて、金銭を要求するようであるならば、その人は偽預言者である。』という記述があります。これはもちろん聖書の基準ではないんですけども、ただ非常に分かりやすいです。食べ物にするという言葉も**第2ペテロ**に使われておりましたが、特に金銭を要求するならば、もう怪しいと思って下さい。献金のアピール、怪しいということです。羊飼いは羊を養うだけではなくて、羊に警告を与えるものでなくてはなりません。そうしなければ羊は肥えるだけ肥えて、あとは食われてしまうんです。狼の餌食にするために羊を養っているわけではないんです。この山上の説教において、まず私たちの羊飼いいエス・キリストは、私たち弟子たちに幸いな道を説いて下さいました。幸いな者とはどういう者か。ちょうど**5章**からそれは始まっていました。『心の貧しい者は、(厳密には霊において貧しい者は)幸いです。天の御国はその人のものだから。悲しむ者は幸いです。その人は慰められるから。柔和な者は幸いです。その人は地を受け継ぐから。』といった「幸いです。」という、幸福になれる、祝福された者となれるというところからメッセージを始められたわけですね。その次の段階で私たちの羊飼いいエス・キリストは、幸いな者となるために私たちは罪を抱えたままでは、汚れたままでは幸いになれないわけですね。きよい者でなければこの幸いに与えることは出来ないわけですね。多くの人たちは「自分はまあまあよくやっている方だ。あの人と比べればまだマシだ。」といったような、自分を自己義認するような傾向を持っているわけですね。でもそんな彼らに対して「あなたがたは情欲の目で女を見るならば、異性を見るならば、既に心の中で姦淫を犯したのだ。」と。「でも私は不倫なんかしていません。浮気なんかとんでもない。」でも既に心の中で姦淫の罪を犯しているんだと。で、姦淫の罪は律法によれば、当然石打ちの刑、死刑に値する重罪であるということ。また、「私は人殺しなんか絶対にしませんし、これからもするつもりもありません。」ところが、心の中で理由もなく兄弟に対して腹を立てるならば、あなたは人殺しだと。そこまで言われると自分が大丈夫だとはとても言えないわけですね。今までは特別悪い人間じゃない。自分はまともな方だ。あの人と比べればマシな方だと思ってあぐらをかいていたかもしれませんが、イエス・キリストは私たちの本当の姿を暴き、そしてただ私たちを断罪する目的ではなくて、私たちをきよくするために、まずは罪の自覚をして、そして救い主を必要とする者にならなければいけない。羊飼いに会わなければ、救い主に会わなければ、私たちは当然自分の問題を自分自身で処理出来ませんので、幸いな者にはなれないわけですね。誰もが幸いな者になりたい。幸福な者になりたい。祝福される者になりたいと願うわけですね。でも、ネックになるその罪の問題、これを私たちはまず認罪ということから、自分の罪を認めるというところから始めなければ、その幸せの道へ進むことは出来ないわけですね。でも、そこには警告が与えられる必要があることを、この山上の説教の結論部分でイエス・キリストは言われるわけですね。先に見た2つの門、狭い門と広い門の2つです。狭い門から入りなさいと。滅びに至る門は大きくてその道は広い。イエス・キリストだけが唯一の道です。命に至る門はたったひとつしかない。それ以外はすべて滅びに至る門であると。見た目は立派で大きくて入りやすい、くぐりやすい、通りやすいというふうに見えるかもしれませんが。でも、その行き着く先は永遠の滅びであるということを警告なさっています。この2つの門をもってイエス・キリストは警告を与えています。分かりやすく、入りやすく、大勢の人たちがこぞって入って行こうとするような門は気をつけなさい。あなたを滅びに至らせるからと。

で、次にイエス・キリストは、この**15節**以降に2本の木について語り、警告を与えています。良い木と悪い木です。良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶということが、**マタイ 7:16～20**にかけて書いてあります。

で、最後のところで、これは **24 節**以降です。**24～27 節**。そこでイエス・キリストは 2 つの土台について警告を与えています。2 つの門、狭い門か、広い門か。どちらを選ぶのか。良い木か、悪い木か。岩の上か、砂の上か。選択肢が与えられています。私たちにチョイスせよと。それによって明暗が別れると、警告を与えて、イエス・キリストは正しい方を選ぶように、命に至る方を選ぶように。滅びに至るもの、偽りによって騙されるもの、また完全に倒壊し、崩壊し、破壊されてしまうものから身を守り、幸いな者となるよう、その見分けをするように、その識別をするように。最終的にイエス・キリストはこの説教の結びで私たちにも選択を迫っているわけです。特に今晚のテキストは **15 節**から **23 節**に絞って、2 本の木の良い木の方を選ぶことを目指していきたいと思います。悪い木、それは悪い実しかならせないわけですが、それが羊の皮を被った狼、偽預言者、若しくは偽牧師の事です。異端を密かに教会内に持ち込む。そのような異端の働きがすべてを台無しにしてしまいます。異端という言葉はギリシャ語では『ハイレスス』"haireisis"と言いまして、**使徒 24:5**では“一派”というふうな言葉で表現されています。また、**ガラテヤ 5:20**では“分派”という言葉で表現されています。もともとこの“ハイレスス”というギリシャ語は悪い意味では使われていません。むしろクリスチャンたちのことを“ナザレの一派”と、それはナザレの“ハイレスス”、それをナザレの異端というふうにユダヤ教徒の人たちは考えたわけです。ただ今日はキリスト教界で異端と言え、それは先程読んだ**第 2 ペテロ 2:1**の『**彼らは、滅びをもたらす異端である。**』“ハイレスス”が使われています。ですから厳密には“一派”であると。若しくは分派である。異端というのは、これは意識と言って良いと思います。キリスト教の中から分かれ出た一派、分派。教会の中から分かれ出たグループ。それがいつしか異端になってしまうということです。最初から異端として発足したわけじゃない。発祥したわけじゃない。でも気が付いたら聖書から逸脱し、暴走していた。そして、それは完全に異端となっていたというケースがほとんどであります。キリスト教の三大異端、皆そのような経緯を持っています。もともとはプロテスタントの教会に属していたわけです。エホバの証人もモルモン教も統一教会も、皆その創始者たちはプロテスタントの教会に出入りし、そして聖書を学び、教会生活を送っていたわけです。でも、その中から分派していったわけです。特殊な一派というものを形成していったわけです。で、気が付いてみたら完全に聖書の教えから逸脱した異端という烙印を押されるようなグループに成り下がってしまっていたわけです。特に先程読んだ**第 2 ペテロ 2 章**のところでは、イエス・キリストを否定するようなグループ。イエス・キリストは神ではない。エホバの証人はイエス・キリストを神に造られた御使いミカエルであると。モルモン教ではイエス・キリストはあのルシファーのお兄さんの御使いであると。それが人の姿をとってイエスとしてこの世に来られたと。統一教会に至ってはイエス・キリストはバプテスマのヨハネのお父さん・祭司ザカリヤとそしてマリヤとの間に不倫の子として生まれた私生児であると。完全にイエス・キリストを否定し、^{おとし}貶めて、イエス・キリストを信じるということも表号しますけれども、でも彼らの信じているというイエス・キリストは私たちの信じているイエス・キリストとは全く別人、別存在ということです。神ではないんです。また、異端の特徴としては必ず聖書の権威を軽視します。聖書を使うんですけれども、文脈から外して、そして自分たちの都合の良い教理を権威付けるために、聖句を引用したりします。でも、これはサタンの常套手段です。サタンも聖書の言葉を乱用するからです。

異端とは別に“カルト”という言葉もよく使われるようになりました。“カルト”というのはキリスト教だけではなく、宗教若しくは宗教でない集団のことも“カルト”と呼ばれることもあるわけです。元々“カルト”というのは『崇拜』とか『祭儀』を意味するラテン語の“カルタス”から来ています。ですからもともとの“カルト”という言葉も悪い意味では使われていなかったんです。否定的な意味で元々使われていたわけではありません。異端のギリシャ語の“ハイレスス”も同様でありました。でも、この“カルト”が社会用語となって、そしてキリスト教の世界ではなくて、非キリスト教の世界において、組織性の

薄い少数の熱狂的な宗教集団というような使われ方をするようになったわけです。で、今日この“カルト”は教会の中でもそのような意味で使われるようになったわけです。異端的な新興宗教、それが“カルト”であるというイメージを私たちは持っているわけです。反社会的な宗教グループ、そういった人たちのことを昨今は“カルト”と呼ぶわけですが、そこにはたいていカリスマ性のある絶対的な指導者が存在して、信者は皆そのような権威を持ったカリスマ性のある指導者に盲従するわけであり、その人の言うことは、神の言うことであるとして絶対服従するわけです。そしてマインドコントロールをされて、自らの思考では最早考えることも出来ない。ただ教祖の言われるままにロボットのように従うだけ。気が付いてみたら身も心も完全に食べ物にされ、滅ぼされて、ボロボロにされてしまう。常識も通じなくなり、犯罪すら平気で犯すようになってしまう。オウム真理教の事件はその最たるものだと思います。でも、それが実は教会の中にまで入り込んで、教会もカルト化してきているという指摘が昨今なされています。そのようなグループのことを“バイブルカルト”と呼んだりもします。教会外ではただの“カルト”、“破壊的カルト”と呼ばれますけれども、キリスト教界内でも実はそのようなカルト化した教会が今日多く見られるようになりました。それを“バイブルカルト”と言います。ショックを受けるかもしれませんが、でもそういう“バイブルカルト”の存在は聖書の中に言及されているわけです。既に警告がなされているわけですから、私たちは驚いてはいけないうことです。有り難いことに既に私たちの羊飼によって、聖書の中に警告が与えられています。

で、私たちの関心事としては“バイブルカルト”に着目する必要があると思います。まあ今日有名となっているキリスト教系の三大異端、エホバの証人やモルモン教や統一教会については今皆さんに敢えて説明する必要もないでしょうし、彼らを見分けるなんてことは、そんなに難しいことではありません。名前は最初から明らかにしませんけれども、すぐに見分けることが出来ると思います。でも、“バイブルカルト”というのは、教会の正統派のグループの中に潜んでいるわけです。ですから、彼らははっきりと聖書の基準に従って識別していく必要があります。霊を見分けるという必要があります。マタイ 7 章の続きを見て頂きたいのですが、16 節に『¹⁶あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。¹⁷ 同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。¹⁸ 良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。¹⁹ 良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。』最終的には先程触れたように、羊飼によって完全に羊の皮を被った狼が滅ぼされるように。良い実を結ばない木、悪い実しか結ばない木もまた切り倒されて火に投げ込まれる。彼らが滅びを免れるという事は絶対はないということをお知らせされていますから、まずは一安心して下さい。野放しにされるということはないということです。そして 21 節に『²¹わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。²² その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』²³ しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』イエス・キリストの名によってこの偽者たちは、偽牧師たちは、偽伝道者たちは、驚くような、眼を見張るような、センセーショナルな、奇跡的な働きを成します。不治の病の人が超自然的に瞬間的に癒される。今までずっと歩けなかった人が急に歩けるようになるとか。また、悪霊に取り憑かれた人が悪霊から解放される。そういうことを沢山彼らは行えるんだと書いてあります。でも、そんな彼らのことをイエスは「全然知らない。」と宣告されます。『不法を成す者ども。』とありますが、“不法”は、神の律法に反すること。すなわち非聖書的、反聖書的なことを成す者どもは全然知らないし、この私から離れて行けと、断罪の言葉を浴びせられています。“バイブルカルト”も「主よ、主よ。」と何度

も何度も主の御名を呼び求めます。そして主の名によって、イエスの名によって数々のミニストリーと呼ばれるもの、癒やしの集会と呼ばれるもの、伝道集会といったプログラム。いろんなプロジェクトを彼らはやってみせます。沢山の人を集めてみせます。沢山の現象をやってみせます。でも、彼らは天におられる父なる神のみこころを行っているわけではないということです。しっかりと見分けていく必要があります。

この“バイブルカルト”のことについては、『教会がカルト化する時』という非常によくまとまった分かりやすいハンドブックがありますので、そうしたハンドブックを通して具体例を見たり、見分けるチェックリストをそこに見ることが出来ます。ウィリアム・ウッドという人が書いたものです。その教会のカルト傾向を測るチェックリストがそこにまとめられていまして、それを簡単に紹介します。このウィリアム・ウッドという人は日本で長らく宣教師をしている人です。権威主義、排他性、教育（説教）、この三つの面から測るといいます。で、それぞれの各項目（権威主義、排他性、教育若しくは説教）を、①比較的軽い症状、②中間、③これはカルト色の濃い問題、というふうにして扱っております。

まず、権威主義の面ですけれども、①比較的軽い症状として、強権的になっている。その教会なり、グループのリーダーは強権的になっている。強権的になっているリーダーが皆カルトの教祖だと言っているではありません。でも、そういう傾向が見え始めている。軽い症状。②中間と言いました。多くの規則を作って信者を束縛している。だんだん怪しくなってきたわけです。で、③はカルト色の濃い問題ということで、牧師批判は神への反逆とみなされる。そういうことを説いている教会はバイブルカルトへの道を突き進んでいるということでもあります。

次に、排他性の面として、①他の教会との交わりが許されない。軽い症状です。②情報コントロールが行われている。（秘密の部分がある。）大分怪しいです。③カルト色の濃い問題として、教会を去った者に汚名を着せる。バイブルカルトまっしぐらです。

で、次に教育の面、説教の面です。①自分の考えを正当化するような説教になっている。まだ軽いです。②律法主義的な傾向が強い。③福音に付属品がついている。これはつまり、福音というのは神の恵みによって信仰を通して救われるというシンプルな救いを複雑化して、福音を信じるだけでは不十分である。福音プラスアルファです。イエス・キリストを信じるだけでは不十分である。プラスアルファ必要である。聖書だけでは不十分である。プラスアルファ。そうした付属品がついているのは完全にバイブルカルトの道を進んでいるということです。

この3つの側面に、3つの段階があるわけですが、そのすべては9つでありまして、その9つのチェックリストのうち1～3つまで当てはまるグループは、カルト的傾向が出てきたと言って良いでしょう、著者のウィリアム・ウッドは分析しています。4～6つまでの場合、カルト色が濃くなっていると判断できるでしょう。7つ以上なら、ほぼカルトに近いということになります。また、忘れてはならないのはそれぞれの面について、③の問題が最も重症であるということです。つまり、権威主義の面では牧師批判は神への反逆とみなされる。排他性の面では教会を去った者に汚名を着せる。教育の面では福音に付属品がついている。まさにこの通りですというような教会は、ほぼカルトに近いという診断を受けてしまうわけです。

実際に牧師も罪人でありますから、時にカルト的な傾向を見せる場合もあるでしょう。ですから、もちろんこのリストで完全に識別して断罪していいということにはならないわけです。ただ、傾向というものを知って、そしてそれを未然に防ぐことも出来るでしょうし、また改善することも可能かと思えます。そういったバイブルカルトという問題が今特にプロテスタントの福音派、そして聖霊派の中にも深刻化しているということでもあります。

で、具体的な異端となってしまったグループ、カルト化してしまったグループ。もともとは普通の教会

だったのに、いつしかカルトに豹変してしまい、いつしか羊の皮を被った狼になってしまった。いつしか悪い実しかならせないグループになってしまった。そうした具体的な例も皆さんの頭の片隅に是非置いて頂きたいと思います。有名なものだけを今皆さんに簡単に紹介しますので、参考にして頂きたいと思ひます。

一つは、『人民寺院』というのがありました。これは若い人は知らないと思ひます。ジム・ジョーンズという人が1955年に設立したものです。このジム・ジョーンズという人は自ら共産主義を信奉する救世主を標榜ひょうぼうしました。そしてサン・フランシスコからガイアナの密林の奥地へ教団を移動して、そして独裁体制を敷いて、強制労働などを信者にさせて、それがマスコミに公表されて、どんどんこのジム・ジョーンズは追い詰められていきます。最後には信者全員に毒を飲ませて、集団自決を図るわけです。900名を超える集団自殺、殺戮というものが世界に衝撃を与えたという事件です。もともとこのジム・ジョーンズという人はメソジスト教会の牧師だったんです。最初は貧しかったので猿を売り歩いて生計を立てていたそうです。後に丁度1960年から核戦争への危惧から南米に核シェルターを建設します。ガイアナのその密林の奥地に行って、そこにユートピアを築こうとするわけです。でも、そこで彼は自ら救い主を名乗って、そして最後は追い詰められた結果、集団自殺、殺戮という恐ろしい、おぞましい悲劇をもたらしてしまつたわけです。

また、『ファミリー・インターナショナル』というグループがあります。デビッド・バーグという人が創立しました。1968年の創立です。昔は『神の子供たち』と呼ばれていました。その後『愛の家族』と名前を変えました。その後『ファミリー』として、2004年からは『ファミリー・インターナショナル』というふうに呼ぶようになりました。このグループは今も存在し、日本にも渋谷に支部があります。カリフォルニアで丁度ジーザス・ムーブメントというものが1960年代の後半に起こりました。そのジーザス・ムーブメントの中心にいたのがカルバリーチャペルのチャック・スミスという牧師だったんですけれども、でもその中で大勢のヒッピーたちが大挙して救われていくんです。カルバリーチャペルだけがそのムーブメントに関わつたわけではありません。ありとあらゆるグループがそのムーブメントの中で神にも用いられ、そしてサタンにも用いられてしまつたわけです。でも、サタンの方に用いられてしまつたのがデビッド・バーグという人です。1970年代、80年代にアメリカだけではなくて、ヨーロッパにおいてもカルト論争を引き起こした団体として知られるようになりました。1974年にはセックスを使って神の愛を表現する。そして改宗者を獲得する。それを専門的に“浮気釣り”という言葉を使ひます。要するに信者を売春婦に仕立て上げて、そして男性信者を引っ掛けていくわけです。それによつて彼らはそれで神の愛を表現すると言ひながら、フリーセックスを通して信者を獲得していったわけです。子供にもセックスを強要して児童虐待も行ひました。その中で精神を破壊されたような信者たちが殺人事件を起こしたりもしてひます。このグループは今でも健在です。『ファミリー・インターナショナル』と言ひます。教えていることは、まるで正統派のキリスト教のようでありひます。気をつけなくてはひけません。

で、日本では『原始福音』と呼ばれるグループ。『神の幕屋』ともいうグループがありますけれども、ある人たちは、これを正統派のキリスト教会と見ておひます。でも、実際のところは異端、カルトでありひます。手島郁郎てしまいくろうという人が創立したわけです。もちろんこの人は、とうに亡くなつてひます。1910年に生まれて、1937年の10代なかばに彼はプロテスタントの日本キリスト教団の教会に入会して、その後は内村鑑三の感化を受けて無教会を経て、最終的にはこの『原始福音、神の幕屋』というグループを形成していったわけです。神によつて癒される“神癒”という奇跡的な癒やしを強調しながら、また“聖書塾”といった聖書を教えるような教育機関も持ち、聖書研究雑誌の『生命の光』と書いた小冊子。よくバス停とかに引っかかっています。見たことがあるかもしれひません。このグループは、キリスト教と他の宗教も融合するような混合宗教であると言ひます。実際にこの手島郁郎の書いたものを抜粋して今

皆さんにご紹介します。

『戦前の日本では皇紀2600年と言って、神武天皇の即位から2600年目を大いに祝ったものです。日本の国というのは天照大御神の御神勅によって神武天皇がその体をたいして始まった国です。それは単なる神話ではありません。今も天皇家の歴史が綿々と続いているという歴史的事実から明らかです。このような不思議な国柄が日本という国です。しかし、戦後の風潮は天照大御神は単なる神話の中の神様だ。日本の国の歴史は精々紀元4、5世紀に始まったのであって、2600年というのは作り上げられた歴史だと今の高等学校や中学校で公然と教えております。(そして神道を彼は受け入れて、キリスト教と融合して、混合宗教として、シンクレティズムとして説いているわけです。)私は世の一般のキリスト教信者からの批判は当然覚悟の上です。私は日本の国を始めた天照大御神を祀ってあるところで不敬なことは決していたしません。どこよりも敬虔な気持ちを持って、「よくぞ天照大御神よ。こんな美しい国をお造り下さった。それゆえに私は存在しています。」と感謝いたします。』と。こういうことが『生命の光』というパンフレットにも書かれています。それは聖書研究雑誌と呼ばれるものです。エホバの証人で言うところの『ものみの塔』の小冊子みたいなものです。ですから、『原始福音、神の幕屋』というのは完全に異端です。

他にも『イエス之御霊教会』というグループがあります。村井ジュンという人が創設しました。この人も1897年生まれです。昔からあるグループです。時折道行く人をつかまえて、そして彼らの教会に連れ込んで、教会の中の洗礼槽に突っ込んで洗礼を授けて、それで救われたというふうなことを言って、ちょっと前には社会問題にもなりましたが、この『イエス之御霊教会』の教理というのは、イエス・キリストは三位一体の第2位格という正統派の教えではなくて、イエス・キリストだけが神であって、イエス・キリストの中に父と子と聖霊の三位一体が存在するという、訳の分からないそういうイエス・キリスト像を説いております。でも、このような教えは“ワンネス”と言いまして、“ワンネス”というのは『1』から来ています。イエス・キリストだけが神であると。確かに聖書において私たちはイエス・キリストだけが救い主であると言いますが、でも三位一体の神の第2位格、子なる神として私たちはそのように表現します。でも、彼らは三位一体という正統派の考えを歪めて、イエス・キリストがただひとりの神で、そのイエス・キリストの中に三位一体が存在するというような、よく分からないそんな教えを説いております。罪の悔い改めも無しに、ただ洗礼槽の中に突っ込んでしまえば、もうそれでその教会の信者というようなやり方をしております。

で、これは2005年にニュースとして報じられた『聖神中央教会事件』、記憶に新しいと思います。元々聖神中央教会というのはプロテスタントの福音派に所属していた教会だったわけです。在日韓国人の主管牧師が起こした事件です。性犯罪です。教会に通っていた少女7人に対して計22件の性的暴行を繰り返したとされる事件です。強姦、および強姦未遂、準強姦の罪に問われました。その聖神中央教会というのは京都にあったんですけど、『大韓イエス教長老会合同派』に属していました。この『大韓イエス教長老会』というのは韓国ではもちろんまともな福音派の大きなグループです。日本でも京都の周辺の福音派にも所属していたような教会だったわけです。ところがそこで韓国の、在日韓国人の牧師(日本名は永田保と名乗っていたそうです。)通称パウロ永田と自称していたわけですが、自分こそがまさに神の代理人であって、自分の言うことを聞かなければ地獄に墮ちるということで、少女たちを恐喝して、または信者たちを恐喝して金を巻き上げたり、また性の道具として乱用したわけでありました。1982年から布教活動が始まって、1987年には宗教法人としても認証されている、社会的にも認知されていたグループだったわけです。

他にも韓国発祥の異端グループで元々は統一教会とも関わりのあった『摂理』というグループがあります。鄭明析(チョン・ミョンソク)という人が設立したキリスト教系のカルト・異端というグループです。2012年の8月12日にソウル中央地裁において、女性信徒に性的暴行を加えたとして、強姦致傷の罪

で鄭明析は起訴されて、そして懲役6年の実刑を言い渡されていました。でも、摂理のメンバーは今でもアクティブに韓国でも、そして日本でも働いております。実際にこの摂理のメンバーと共にバイブルスタディーをしていたという人も東京からこの教会に来たことがあります。でも、その人は幸いイエス・キリストをちゃんと信じる事が出来、救われました。

で、他にも韓国発祥のグループとして『万民中央教会』、若しくは『万民中央聖潔教会』というグループがあります。この『万民中央教会』の枝教会は長野にもあります。飯田というところにあります。創始者は李載祿(イ・ジェロク)という人。このイ・ジェロクは自らを無原罪の人と呼んでおります。カトリックがマリヤのことを無原罪マリヤというように、このイ・ジェロクという人は「私には罪が無いんだ。」と、そしてキリストと私は同じものである、同列であるということを主張しているそうです。で、このイ・ジェロクは「神の右の座にはイエスが座っており、左は空いていたけれども私が左の席に今は座っているんだ。」と、そういう権限を得たというようなことを口走っています。完全に異端です。

で、最近最も脅威となっているカルト、異端。それはほとんど韓国系というものなんですけれども、正体を隠して既成教会の中に潜入してきます。長い年月をかけて牧師や信徒の信頼を得ます。「私は何でもやります。教会のためならば何でもやります。」と言って、如何にも献身的な信者のように見せかけて、そして気が付いたら教会の役員・リーダーとなって、そして気が付いたら仲間を増やして、そしてその教会の牧師を解任・罷免してしまうわけです。で、最終的に教会を乗っ取るということをします。そのようなグループは『新天地イエス教証しの幕屋聖殿』と言います。『新天地』と略称で言います。この『新天地イエス教証しの幕屋聖殿』通称『新天地』の救い主は、この『新天地』の創設者である李萬熙(イ・マンヒ)という人です。もう80を超えた老人です。韓国では著名なメガチャーチという教会が皆この『新天地』の被害を受けているということです。サラン教会という有名な教会があります。弟子訓練で知られている教会ですけれども、そこに『新天地』のスパイが入り込んで、そして470人も信徒がこの『新天地』に転向してしまったということです。また、ミョンソン教会では1000人が、チョアン長老教会でも1000人が、デジョン教会でも数百人が離脱して、この『新天地』に転向してしまったということです。日本では考えられない話です。ほとんどの教会にこの『新天地』が既に入り込んでしまっている、浸透してしまっていると指摘されています。世界最大のヨイド純福音教会、チャー・ヨンギという人の教会。75万人とかいうそういう教会です。でも、そこには1000人位の『新天地』の変装したグループがもう入り込んでいるということです。1000人を送り込んでいるんです。で、オンヌリ教会というところには数百人が入り込んで活動しているということです。そういうことがもう判明しているということです。で、日本にもこの『新天地』のスパイが約200人入り込んできているということです。彼らのことを「収穫の働き人」と呼ぶそうです。これは『新天地』に転向してしまった牧師も数知れずということです。牧師までもたぶらかされるということです。そしてこの『新天地』の教祖イ・マンヒこそが救い主であると信じてしまうわけです。

韓国には自分が再臨の主だと主張する教祖が50人いるそうです。キリスト教系の異端・カルトの教勢というのは少なくとも200万人、最大で300万人と推定されます。これは韓国のキリスト教人口の四分の一に相当するそうです。韓国のキリスト教会の四分の一は異端だということです。この事実を私たちは知らなくてははいけません。多くの教会が異端によって傷を受けています。その被害は深刻だということを知って下さい。

その他にも『タベラ世界宣教会』『タミ宣教会』『ベレア』とか、『タラッパン運動』とか、『喜びのニュース宣教会』。幸いこのようなグループは私たちの周辺には今はありません。名乗っていないだけかもしれませんが、多分いないと思います。いずれにしても今名前を挙げたグループは日本にももう入ってきているグループです。もう韓国にはもっと沢山の異端グループが存在するんですけれども、今挙げた名前は日

本にも入り込んで来ているグループということですから、いつかこのようなグループを皆さんは目にすることがあると思いますし、ひょっとしたらこの教会にも入り込んで来るかもしれません。気をつけなくてはいけません。『にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。』食べ物にするわけです。但し、彼らを私たちは実によって見分けることも出来ると。これは果実を検査する検査官のような働きです。マタイ 7:1 では『さばいてはいけません。さばかれないためです。』とされています。私たちは“どんな意味においてもさばいてはいけない”とはされていません。文脈を見て頂くと、前回見た通りです。偽善的なさばきは禁じられています。ただここでは特にさばきというよりも、むしろ識別するように、見分けるようにということが言われています。断罪するというさばきではなくて、良い気か悪い木かを見極めるように。羊の皮を被った狼が入り込んでいないか、それを見極めるようにという、その意味において判断しなさい、識別しなさいという話です。同じさばきでも、断罪ということではなく、丁度果物を検査するような、果実を検査するような検査官の働き。裁判官じゃなくて、検査官です。人を罪に定めるのではなくて、人を見分けるというさばきです。断罪するというさばきではなくて、識別するというさばきです。これを混同してはいけません。どんな意味においてもさばいてはいけないということじゃありませんから、ある人たちはあなたが聖書からものを言う時に、「あなたは私をさばいている。聖書にはさばいてはいけないと言っているのに、あなたは私をさばいている。」というあなたは、私をさばいていると言いついて返してあげてください。それはそれとしまして、このように気をつけなさいというのがイエス・キリストの命令であり、また見分けることが出来るというのはイエス・キリストの約束であります。だから、あなたにも出来るんです。で、あなたもしなければいけないんです。イエスはワザワザ警告を与えて下さっています。私たちが幸いな信仰生活を送るために。私たちがきよい信仰生活を続けることが出来るためには、警告をしっかりと受けながら、不幸にならないように、純潔を失わないように、汚れた者にならないように、身を守っていくという必要があります。また他者も周囲の人たちも兄弟姉妹も他の教会も、私たちは神の家族というキリストのからだという同じ共同体ですので、同じ家族ですので、しっかりと目を凝らしながら、見張りながら、私たちがイエスの警告を他の人たちにも伝えていく義務があると思います。

それにしても **21 節**のところをもう一度見て下さい。『²¹わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。』と。神のみこころというのは、まさにイエスの名によって預言をすること、**22 節**にあります。イエスの名によって悪霊を追い出すこと、イエスの名によって奇蹟をたくさん行なうことが、天の父のみこころのように私たちは思ってしまうわけです。「彼らは神のみこころを行っているじゃないですか。立派な神の働きを担っているじゃないですか。活躍しているじゃないですか。全く聖霊が力強く働いているとしか言いようがありません。どこがおかしいんですか。どこがいけないんですか。何が間違っているんですか。彼らを羊の皮を被った狼と言うのはおかしいじゃないですか。彼らの実は皆良い実じゃないですか。」と思うかもしれません。羊の皮を被った狼のくせに、どうしてこんな素晴らしいことが出来るのか。私たちは首をかしげるかもしれません。すぐに人をさばいてはいけないということは、これは慎重でなければいけないということは、前回お話した通りです。でも、しっかりと観察して、しっかりと吟味して、しっかりと識別すること。果実の検査官のように、ちゃんとその果実は健全なものかどうか、悪いものじゃないかどうか。毒が混じっているかもしれません。しっかりと私たちが識別する必要があります。

チャールズ・スフィンデルというアメリカの有名な牧師が、クリスチャンが他の人を批判してはいけない 7 つの理由を挙げていますから、それを心に留めて頂きながら識別作業に入って頂きたいと思います。

クリスチャンが他の人を批判してはいけない 7 つの理由

1. 私たちはすべての事実を皆知らない。
2. 私たちはその動機を完全に理解出来ない。
3. 私たちは完全に客観的な考えをすることは出来ない。
4. その状況に居なければ、正確に知ることは出来ない。
5. 私たちには見えない部分がある。
6. 私たちには偏見があり、視野が薄れていることがある。
7. 私たちは不完全で、一貫性がない。

だから、クリスチャンをつかまえて、その人をやたらめったら性急に悪者として烙印をし、断罪してはならないと言っているわけです。慎重でなければいけません。先程挙げたような『教会がカルト化する時』のようなパンフレットにあるチェックリストをもって、「ああ、これに該当するからこの教会はバイブルカルトだ。この教会の牧師はカルトの教祖だ。」とか短絡的に、性急に判断してはいけません。チャールズ・スフィンデルの言葉は、知恵のある言葉ですので、是非心に留めて頂いて、慎重になって、その上で断罪ということではなく、事実関係を確かめながらちゃんと識別をしていくということ。吟味をするということ。鵜呑みにしないということ。それが今私たちに求められていることです。

で、話を戻していきたいと思いますが、どうして羊の皮を被った狼がイエス・キリストの名前においてこんなにも凄いことをやってのけることが出来るのか。何でこんな沢山いろんなことが出来てしまうのか。不思議に皆さんは思われると思います。で、その答えとして3つの可能性を皆さんにお分かちしたいと思います。

まず、第1番目に「主よ、主よ。」と言っているこの人たちは嘘をついていたという可能性です。イエスの名によって預言をし、イエスの名によって悪霊を追い出し、イエスの名によって奇蹟をたくさん行ったと言うのは、彼らのでっち上げだったという話です。可能性ということです。このようなことをでっち上げるということは、よくあることです。可能なことです。実際にいろいろな癒やしの集会などで癒やしの報告がなされますけれども、その多くは眉唾ものというものが結構あります。何かを強く信じる心理作用による癒やしというものが確かにあります。それを専門用語で“プラセボ効果”と言います。よく昔は砂糖の錠剤などを飲ませて、若しくは食塩水とか液体を飲ませたり、色のついた液体を飲ませて、「これはあなたの病気に効くから飲んでみなさい。」と言って、それを飲むと本当に効果が現れて効いてしまうわけです。でも、実際にはその錠剤は砂糖なんです。実際に飲んだ水は、ただの塩水、ただの食紅で色の付いた水なんです。でも、飲んだ当人は「これは効くんだ。」と本気で信じて飲んだわけです。そのように何かを強く信じる心理作用によって癒やされるということは、昔からあるものです。プラセボ効果というものです。心理療法とも言えるでしょう。で、多くの集会では、大勢の人たちが集まって集団催眠のようなことも行われます。カリスマ性のある指導者が、ステージの上から手を上げてそして祈りながら（皆目を閉じています。）そして聖霊によって倒れるように大きな声で言われると、倒れなければいけないような気になって、みんなバタバタ倒れているから私も合わせて倒れないと何か浮いてしまうようで、気が付いたら倒れていた。不思議な現象に何か癒された気がする。何か満たされた気がする。そういったことが起こるわけです。病院でも患者の8割は精神、身体相関の様相を持つということでもあります。昔から「病は気から。」と言います。ですからその気の部分が、気持ちの部分が癒やされると、体もいろんな病気も同時に癒やされる。インシュリンの量も変わるそうです。感情的に高揚すると、興奮状態になると、脳に刺激を受けて、モルヒネの200倍というエンドルフィンが神経経路に大量放出されます。痛みを感じなくなるんです。アドレナリンという言葉もありますけれども、エンドルフィンというのは脳内麻薬とも言います。それが出てくるわけです。マラソンをしている人ならば、ランナーズ・ハイというのがあるわけです。そういう

ものによって痛みを忘れてしまう。そして何か障害を抱えていたものとか、病気をもっていた者がその時には癒された気になってしまうわけです。こういうこともまことしやかに、神によって癒やされた。この癒やしの伝道者によってみたいなのが、喧伝されてあたかもイエスの名によって、奇蹟が行われたというふうに見なされてしまうところがあります。大勢の人がそれを見たり聞いたり、その雰囲気の中に飲まれていると、集団真理作用というのが、集団真理操作というものが行われるわけです。皆でハレルヤ、アーメンと言っている間に、自分も口裏を合わせるようにして、その伝道者の言いなりになって、それに合わせて言動するようになります。皆で集会の中でそれをやりますから、だんだん自分もその中の一部となって飲み込まれていくわけです。会場は照明なども効果的に使われて、暗くなったり、急に明るくなったり、急に説教者が叫んだり、絶叫してみたり、号泣してみたり、そういった感情もうまく利用しながら、そして集団催眠をかけたりしながら、音楽も効果的に使われます。マインド・コントロールも効果的に使います。同じ言葉を何度も何度も繰り返したり、そういうことで人々は癒やされた気になってしまう。実際にプラセボ効果というのがあるわけですから、確かに癒やされた人もあるわけです。でも、その多くは眉唾もの。またその後には振り返るとか。その時には、一時は癒やされた気になるんですけども、また一週間後、数カ月後にはまた元に戻ってしまったとか。でも、イエス・キリストの癒やしは、一度癒やされたらずっと癒やされているんです。もちろん人は死ぬものですから、いつかは老化して死ぬわけですけども、また振り返るといようなケースは少なくとも福音書の中には記されてはいません。それが本当にイエス・キリストによる癒やしならば、一過性の癒やしではないということです。少なくともその一つの病気は癒され、他にも病気にかかる可能性はありますけれども、でもまたすぐに二三日後には振り返るとか、元通りになってしまうということは、あり得ないということです。プラセボ効果ならそれも説明できるということです。

また、預言なんかする時も、あらかじめ情報を収集しておいてから預言するとか。集団の中にその伝道者のスパイが入り込んでいるわけです。で、全部声も録音されているわけです。それが無線で飛ばされて、その伝道者の方に情報が入っていくわけです。この人はこういう人であるとか。この人は何年に生まれて、こういう人生を経てきてとか。今こういう問題を抱えているとか。そういうことを質問しながらそれが無線によって伝道者に飛ばされて、そしてそれを伝道者があたかも神から啓示されたかのように。これが預言として降りてきたかのように、ステージの上から言ったりするわけです。そうするとそれを聞いた人は、「これは私のことだ。何故私のことを知っているんだろうか。」というようなことで、まさにそれは聖霊の働きであるというふうに、これもテクニックとしてよく使われるものであります。

で、次に3つの可能性があると言いましたが、2つ目として狼がどうしてイエスの名によってこんなにも沢山のことが出来てしまうのか。二番目は神の力によってではなく、悪霊の力によって実はこれこれの不思議な御業を成すことが出来るということです。悪霊の力によって預言をする。悪霊を追い出す。奇蹟を沢山行なう。ということは可能なんです。後にも開いて見たいと思いますけれども、**使徒8章**というところに魔術師シモンのことが出てきます。彼は元々魔術、悪霊の力によって奇蹟を行っていたんです。大能の人というくらい有名な人だったわけです。でも、その彼も**使徒8章**を見て頂くと伝道者ピリポを通してイエス・キリストを信じた。そしてバプテスマを受けたと。ところがこの人は実際には救われていない、自称クリスチャンだったということが後で判明します。でも、元々魔術師として魔術を行なえたわけです。で、モーセの時代もモーセがパロの目の前で様々な奇蹟を行いました。パロのもとに仕えていた魔術師、呪法師、呪術師という人たちも、モーセと同じ奇蹟をやったのけたわけです。杖が蛇になったから、彼らもまた杖を蛇に変えてみせたり、同じようなことを彼らも行なうことが出来たわけです。ですから、悪霊の力によっても奇蹟を行なうことが出来るということです。**第2テサロニケ 2:9~11**も参照して頂きたいと思います。『**不法の人の到来は、(これは反キリストのことです。)サタンの働きによるのであって、あ**

らゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、¹⁰ また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。(力、しるし、不思議が行われるんですけども、それはすべて偽りの働きです。サタンの働きです。でも、この力、しるし、不思議という言葉は、イエス・キリストがなされたものと全く同じものです。イエス・キリストも力、しるし、不思議といった超自然現象を神の力で成し遂げられたわけです。でも、この反キリストという人物も、キリストにとって変わる者。この人物も悪霊のちからによって、サタンの働きによって、イエスと全く同じような奇蹟をやってみせるわけです。致命傷を受けながらも、もう死んだと思われながらも、そこから甦ってもみせるわけです。人々は完全に騙されてしまう。そういうことが世の終わりに起こるということです。) ¹¹ それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。』

で、もう一つ、3つ目の可能性として、狼がどうしてイエス・キリストの名によってこんなにも沢山の奇蹟的なわざを成し遂げることが出来るのか。3つ目は、神が彼らをただの道具として使われたという可能性です。だから出来たということです。例えば、新約聖書にも名のある偽預言者バラムという、この人は有名なメシヤ預言までしているんです。偽預言者にもかかわらず、イエス・キリストのことを預言しているんです。ですから、この完全に悪霊の手下となっていた、悪魔の手下となっていたこのバラムですら、イエス・キリストのことを預言する素晴らしい預言を神は道具として使っているわけです。イエスを十字架刑に追いやった大祭司カヤパも、ヨハネの福音書 11 : 50 で預言しています。『ひとりの人が民の代わりに死んで、国民全体が滅びないほうが、あなたがたにとって得策だということも、考えに入れていない。』これも敵による預言です。神が悪人を使うということです。ですから、イスカリオテのユダもそういう意味では神の道具として使われたというふうに言えるわけです。

そして、もう一つの指摘としまして、テキストに戻って頂いて、7章 22 節のカギ括弧の中に『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、(私たちは) あなたの名によって悪霊を追い出し、(私たちは) あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』“私たちは”という言葉が沢山使われているんです。日本語では一箇所しかありませんが。私たちは、私たちは、私たちは。主ではなくて、私たちが、これは危険なサインです。偽預言者は神が成される働きを自分が成した働きとして、自分に栄光を帰する働きとして、自分が感謝され、自分が賞賛され、自分がスポットライトを浴びるといった目的でやるわけです。私たち、私たち、私が、私が、ということです。

そして、使徒 8 章のところに先程魔術師シモンのことが言及されているということも言いました。そちらに目を移して頂きたいと思います。伝道者のピリポが聖霊に満たされてパワフルに宣教活動を展開しています。使徒 8 : 9 に『⁹ところが、この町にシモンという人がいた。彼は以前からこの町で魔術を行なって、サマリヤの人々を驚かし、自分は偉大な者だと話していた。¹⁰ 小さな者から大きな者に至るまで、あらゆる人々が彼に関心を抱き、「この人こそ、大能と呼ばれる、神の力だ。」と言っていた。¹¹ 人々が彼に関心を抱いたのは、長い間、その魔術に驚かされていたからである。¹² しかし、ピリポが神の国とイエス・キリストの御名について宣べるのを信じた彼らは、男も女もバプテスマを受けた。(で、注目すべきは 13 節です。) ¹³ シモン自身も信じて、バプテスマを受け、いつもピリポについていた。(ピリポのカバン持ちになったわけです。) そして、しるしとすばらしい奇蹟が行なわれるのを見て、驚いていた。¹⁴ さて、エルサレムにいる使徒たちは、サマリヤの人々が神のことばを受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネを彼らのところへ遣わした。¹⁵ ふたりは下って行って、人々が聖霊を受けるように祈った。(これが聖霊のバプテスマです。) ¹⁶ 彼らは主イエスの御名によってバプテスマを受けていただけで(水のバプテスマだけで)、聖霊がまだだれにも下っておられなかったからである。¹⁷ ふたりが彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。¹⁸ 使徒たちが手を置くと聖霊が与えられるのを見たシモンは、使徒たちのところに金を持って来て、¹⁹ 「私が手を置いた者がだれでも聖霊を受けられるように、この権威を私にも下さい。」と言った。(売っ

て下さいと言ったわけです。) ²⁰ ペテロは彼に向かって言った。「あなたの金は、あなたとともに滅びるがよい。あなたは金で神の賜物を手に入れようと思っているからです。 ²¹ あなたは、このことについては何の関係もないし (先程マタイ 7 章でイエス・キリストは、「あなたがたのことは全然知らない。」という言葉を使いました。)、それにあずかることもできません。(関係もないし、あずかることもできない。) あなたの心が神の前に正しくないからです。 ²² だから、この悪事を悔い改めて、主に祈りなさい。あるいは、心に抱いた思いが赦されるかもしれません。(このままでは赦されずに滅びる。金とともに滅びると警告しているわけです。) ²³ あなたはまだ苦い胆汁と不義のきずなの中にいることが、私にはよくわかっています。」(これは言い換えれば、「あなたはまだ救われていない。」と言っているわけです。まだ赦されていないということです。で、そのままでは当然地獄行きだと言っているわけです。すると **24 節**で、) ²⁴ シモンは答えて言った。「あなたがたの言われた事が何も私に起こらないように、私のために主に祈ってください。」(ペテロはシモンに対して「この悪事を悔い改めて、あなたが主に祈りなさい。」と、自分で祈れと言ったわけです。でも、このシモンは祈ろうともしません。)』そもそも彼はすべてを勘違いしていました。すべてを誤解していたんです。間違った考え、間違った信仰を持っていました。キリスト教信仰も、また聖霊も、聖霊の賜物、聖霊の力、救いについても、何もかも間違っていたわけです。何もかも勘違いしていたわけです。そして自分自身も救われていないということにすら気付いていなかったわけです。

その一方で、対象的に **26 節**に『²⁶ところが、主の使いがピリポに向かってこう言った。「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。」(このガザは今、荒れ果てている。二千年経った今も荒れ果てています。) ²⁷そこで、彼は立って出かけた。すると、そこに、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の財産全部を管理していた宦官のエチオピア人がいた。彼は礼拝のためエルサレムに上り、 ²⁸いま帰る途中であった。彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいて、 ²⁹御霊がピリポに「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい。」と言われた。 ³⁰そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、「あなたは、読んでいることが、わかりますか。」と言った。 ³¹すると、その人は、「導く人がなければ、どうしてわかりましょう。」と言った。そして馬車に乗っていっしょにすわるように、ピリポに頼んだ。 ³²彼が読んでいた聖書の箇所には、こう書いてあった。「ほふり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかつた。 ³³彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。彼の時代のことを、だれが話すことができようか。彼のいのちは地上から取り去られたのである。」(イザヤ 53 章を読んでいたので。) ³⁴宦官はピリポに向かって言った。「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えてください。(苦難のしもべとは一体誰のことですかと。) 自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」 ³⁵ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた。(聖書からイエス・キリストを宣べ伝えたわけです。) ³⁶道を進んで行くうちに、水のある所に来たので、宦官は言った。「ご覧なさい。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。」 ³⁸そして馬車を止めさせ、ピリポも宦官も水の中へ降りて行き、ピリポは宦官にバプテスマを授けた。 ³⁹水から上がって来たとき、主の霊がピリポを連れ去られたので、宦官はそれから後彼を見なかったが、喜びながら帰って行った。』

同じ **8 章**に魔術師シモンの偽りの回心と、エチオピアの宦官の真の回心が対象的に描かれています。魔術師シモンの回心は偽りだったわけです。何故偽りなのか。それは、エチオピアの宦官の回心と読み比べて頂くとよく分かると思います。これは使徒の働きでもう既にカバーしているところなので、敢えてそこを一つ一つ事細かに検証することは今は致しません。でも、是非皆さんでそれをやってみて下さい。どこがどう違うのか。魔術師シモンとこのエチオピアの宦官。同じようにしてイエス・キリストを信じ、同じようにして水のバプテスマを受けた両者ではありますけれども、でもシモンは救われてなかったんです。あなたはどうか。ドキッとしましたか。イエス・キリストをあなたは信じていますか。信じているか

からこそ、あなたは水のバプテスマを受けたはずです。でも、だからといって救われているとは限らないんです。皆さんを脅しているわけでもありませんし、皆さんの救いを疑うようにとけしかけているわけではありません。ただ、あなたは本当に救われていますか、ということをお問うているだけです。で、この間は決していたずらにあなたを脅かすものではなくて、逆にあなたがこの間をもって自分の救いというものを再吟味し、再検証して、そしてその救いが真の救いとして確認されたならば、あなたはさらなる喜びに満ちて、さらなる感謝に満ちて、確信を持って、平安を持って自分の救いをエンジョイできると思います。でも、どこか心の中に「本当に私は救われているのだろうか。いろいろ言われるとちょっと不安になってしまう。」という人があるならば、これを機会にもう一度検証してみてください。そして実際のところ「私は本当に救われていなかったんだ。」ということに気付いたならば、今晚中にあらためてイエス・キリストを信じる決心をして、ちゃんと自分の救いを確かなものとして頂きたいと思います。

第2 ペテロ 1:10 を見て下さい。ペテロは先程魔術師シモンに対して「あなたは救われていない。」とハッキリ言いました。そのペテロの書いた手紙です。『**ですから、兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたことを確かなものとしなさい。**(これは言い換えれば、「救いを確かなものとしなさい。’) これらのことを行なっていれば、つまづくことなど決してありません。』あなたが救いの確信を持っているならば、何があってもあなたはつまづくことはない、と言っているんです。ビビることはない。パニックすることはない。救われているんだったら、何があってももう大船に乗った気で良いわけです。急にすべてを失っても、救いは失わないんです。間違いなくあなたは天国に行けるんです。あなたは永遠の命をもう頂いているんです。あなたは神の子供です。キリストの花嫁です。これは変わらないんです。これは失うことはないんです。たとえ健康を失っても、たとえ財産を失っても、たとえ愛する者を失っても、たとえすべてを失っても、救いだけは失うことがないということです。で、それを確かなものとするれば、あなたは絶対につまづくことはありません。魔術師シモンもイエス・キリストの御名を信じて、水のバプテスマを受けたんです。でも、彼は救われていなかったんです。彼はいろんなことを勘違いしていました。信仰についても、救いについても、聖霊についても、聖霊の力についても、聖霊の賜物についても、何もかも勘違いしていたわけです。皆さんはそれらに対してちゃんと正しい理解を持っているでしょうか。勘違いしていないでしょうか。自分を一角の人物のように思っていないでしょうか。我こそは神の力、大能であると。シモンは未だにそう思っていたんです。だから、聖霊のパワーを金で買って、もっと力ある者になろうと思ったわけです。自分を何様かと思っているわけです。出来る人間だと思っているわけです。「もっと人を驚かしてやろう。人をびっくりさせて、感心させて、自分の有能さを印象付けてやろう。」自分自身のことも勘違いしていたわけです。自分自身のことすら勘違いしている。その者がイエス・キリストのことを正しく知ることが出来るのでしょうか。私たちはただの罪人です。私たちは塵に過ぎないものです。無に等しいものだと言われています。でも、そんな私たちに神の恵みが注がれ、そして空っぽの私たちが聖霊によって満たされ、聖霊の力を受けて、自分には到底出来ないことも、想像もしたことをないことまで、神様がこの私を通して、あなたを通して成し遂げて下さる。神はほむべきかな。主に栄光あれ。ということになるわけですが、シモンはそう思わなかったわけです。

ヨハネ 2:23~25 も参照して頂きたいと思います。『²³ **イエスが、過越の祭りの祝いの間、エルサレムにおられたとき、多くの人々が、イエスの行なわれたしるしを見て、御名を信じた。**(多くの人がしるしを見てイエスの名を信じたわけです。魔術師シモンもしるしを見て信じたわけです。宦官はどうだったでしょうか。イザヤ書 53 章を読んでいて、聖書を読んでいて、その聖書からイエス・キリストのことを説かれて彼は信じたわけです。何が違うんでしょうか。) ²⁴ **しかし、イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかった。**(“おまかせにならなかった” というのは、実は 23 節の“信じる” という言葉と同じ言葉が使われています。その否定形ですから、直訳は「イエスは彼らを信じなかった。」彼らはイエスを信じたんですが、イ

イエスは彼らを信じなかったんです。)なぜなら、イエスはすべての人を知っておられたからであり、²⁵また、イエスのご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。』信仰には幅があるんです。「イエスを信じています。」と言っても、いろんな信仰があるということです。エホバの証人も「イエスを信じている。」と言います。モルモン教も「イエスを信じている。私たちは新生したクリスチャンです。ボーン・アゲイン・クリスチャンです。」と自称します。当然のことながら統一教会も「私たちこそがクリスチャンです。」と、「真のクリスチャンです。」と言います。最近取り上げたキリスト教系のカルト・異端も皆「イエスを信じている。」、皆「自分たちこそが真のクリスチャンだ。」と言います。でも、皆がみんな本当に救われているわけじゃないんです。

ヨハネ 8 : 31,32 もひかえて下さい。『³¹そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。(信じたユダヤ人。30 節に『イエスがこれらのことを話しておられると、多くの者がイエスを信じた。』とあります。その信じたユダヤ人たちに、こう言われました。)「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるならば、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。³²そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。』」ここでは、人々は、ユダヤ人はイエスの言葉を信じたんです。聖書の言葉を信じたんです。では、この回心は確かなもの、神聖なものですと私たちはそう早合点してしまうかもしれませんが、続きを見て下さい。43~47 節。文脈です。“あなたがた”と言っているのは、ずっとこれはイエスを信じたユダヤ人のことです。『⁴³あなたがたは、なぜわたしの話していることがわからないのでしょうか。(あれ、彼らはイエスの話していることを信じたのではないのかなと思うわけです。)それは、あなたがたがわたしのことばに耳を傾けることができないからです。⁴⁴あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。⁴⁵しかし、このわたしは真理を話しているために、あなたがたはわたしを信じません。⁴⁶あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。わたしが真理を話しているなら、なぜわたしを信じないのですか。⁴⁷神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。』」でも、この“あなたがた”はイエスの言葉を信じたんです。聞いて、信じたんです。しかし、従わなかったんです。分かりますか、この信仰の幅が。聖書の言葉は信じます。イエス・キリストの御名は信じます。でも、その信仰には幅があるんです。神から出た者ならば、神のことばに聞き従う。これが実です。実によって見分けなさいと、イエスは言われました。皆さんにも神のことばが与えられています。聖書を皆さんは信じていますか。この中には、信じていないという人はひとりもいないと思います。でも、このヨハネの 8 章に出てくるユダヤ人たちも神のことばを信じたんです。でも、彼らは“悪魔の子”だと言われています。救われていないということです。あなたは誰の子ですか。本当に救われていますか。救われているならば、あなたは神のことばに聞き従っているはずです。イエス・キリストが話していることが、あなたには分かるはずです。

ヨハネ 10 章には「わたしの羊はわたしのことばを、声を聞き分ける」と。イエスの羊ならば、イエスの声を、羊飼いの声を聞き分けることが出来るんです。でも、イエスの羊でなければイエスの声を聞き分けることは出来ません。何故聖書が分からないのか。聖書を信じている。でも、聖書が分からない。そういう人がたまにいます。その人は聖書のことばに聞き従っていないから分からないんです。で、聞き従っていない者はまさに悪魔の子のような状態にあるということです。なぜならば、悪魔も聖書を信じているからです。悪霊も神はただお一人だと信じているんです。その信仰は凄い信仰です。イエス・キリストを前に彼らは震え上がっているんです。私たちはあまりそのような畏敬の念を抱くことはないと思います。イエスが目の前にいても、平気で罪を犯します。悪霊はイエスを目の前にして平気で罪を犯せないんです。

怖いからです。イエスの力を知っているからです。イエスがどれだけの権威があるのか。悪霊はよくわかまえています。でも、私たちはどうでしょうか。神のことばを信じている。それだけでは不十分です。神のことばに聞き従わなければなりません。イエス・キリストを信じている。それだけでは不十分です。あなたは自分を捨て、自分の十字架を負って、その上でイエスについて行かなければ、イエスの本当の弟子ではないです。イエスの本当の弟子は、イエスのことばに留まると、先程読みました。で、そういう人は、真理を知って、真理によって自由にされています。

もうこの辺で終わりたいと思うですけれども、次回に『山上の垂訓』の結論のところを見たいと思います。今日の時間を閉じる前に、一つの詩を皆さんに紹介します。これはドイツのリューベック大聖堂の中に掲げられている世界的に有名な信仰の詩です。ポエム。で、これは英語で有名となっているので、日本語ではこれを翻訳したものは探したんですけれども、ありませんでしたので、私が訳しました。私訳で訳しました。なるべく直訳に、逐語訳にして訳しましたので、ちょっとごちないところがありますけれども、詩ですからもうちょっと本当は美しく詩的に表現したかったんですけれども、一応英語のものは韻を踏んだりしているので詩らしく聞こえます。日本語だとちょっとそのようなことは出来なかったので、内容だけ、後で翻訳したものを紹介します。

とりあえず原文から言います。

Ye call me Master, and obey me not;

Ye call me light, and see me not;

Ye call me the Way, and walk me not;

Ye call me life, and desire me not;

Ye call me wise, and follow me not;

Ye call me fair, and love me not;

Ye call me rich, and ask me not;

Ye call me eternal, and seek me not;

Ye call me righteous, and trust me not;

Ye call me noble, and sub me not;

Ye call me might, and orner me not;

Ye call me just, and fear me not;

If I condemn you; blame me not.

これを日本語で、

あなたがたはわたしを主と呼ぶが、わたしに従わない。

あなたがたはわたしを光と呼ぶが、わたしを見ない。

あなたがたはわたしを命と呼ぶが、わたしを慕わない。

あなたがたはわたしを賢いと呼ぶが、わたしについて来ない。

あなたがたはわたしを美しいと呼ぶが、わたしを愛さない。

あなたがたはわたしを富む者と呼ぶが、わたしに尋ねない。

あなたがたはわたしを永遠と呼ぶが、わたしを求めない。

あなたがたはわたしを恵み深いと呼ぶが、わたしに信頼しない。

あなたがたはわたしを高貴と呼ぶが、わたしに仕えない。

あなたがたはわたしを力ある者と呼ぶが、わたしに敬意を払わない。

あなたがたはわたしを正しいと呼ぶが、わたしを恐れない。

もし、わたしがあなたがたを罪に定めても、わたしのせいにはならない。

という内容です。これは世界的に知られている詩ですけれども、残念ながら日本語ではあまり公には訳されて公表はされていないようです。私たちはイエスを主と呼びます。「主よ、主よ。」よく言います。でも、天の父のみこころを行わない限り、その「主よ、主よ。」はただの無駄口、ただの独り言、若しくは主の御名をみだりに唱える神への冒瀆だということです。もし、あなたが主を主として、主に従わないならば、あなたの祈りも、あなたの礼拝も、あなたの賛美も、あなたの奉仕も、あなたの献金も、あなたの教会生活のすべては、全部意味のない、価値のない、無駄なものだということです。イエスを主とするならば、あなたはイエスを主として、仕えて、そして自分をしもべとしてこの主に付き従っていかねばなりません。ですから、真の信仰者、本当に救われている者ならば、このドイツのリューベックの大聖堂に刻まれているこの詩をしっかりと心に留めて、そして主があなたの心にこの詩を投げかけておられるということを感じて、それに対して応答して頂きたいと思います。

あなたはわたしを主と呼ぶが、あなたはわたしに従っていない。それは何故なのか。主は問われています。

光と呼んでいるのにもかかわらず、その光を見ようとしないのは一体何故なのか。

命と呼んでいるはずなのに、どうしてこのわたしを誰よりも慕わないのか。

わたしを賢いと言うのに、どうしてわたしについて来ないのか。

わたしを美しい・素晴らしいとあなたは呼ぶが、わたしを愛さない。わたし以外のものをあなたは慕って愛そうとするのか。

わたしをリッチだと、富む者だと呼ぶくせに、わたしには何一つ尋ねないのは、一体何故なのか。どうして人にばかり尋ねるのか。どうして人を当てにするのか。

永遠と私のことを呼ぶくせに、わたしに何も求めないのは一体どうしたことか。

恵み深いとわたしのことを呼ぶけれども、何故わたしに全幅の信頼を置かないのか。

高貴だ、貴いとわたしを呼ぶのに、わたしに仕えないとは一体どういうことか。

力ある者だと、マイティー”mighty”だと言いながら、どうしてわたしに敬意を払わないのか。

わたしのことを正しい、正義だ、義なる神だ、と言いながら、恐れもしないのは一体何事か。

わたしがあなたを責めても、罪に定めても、決してわたしのせいにはしてくれないなど。

わたしを責めてくれるな。

それが、もしかしたら今晚主があなたに問われて、この詩を通じてあなたに促していることかもしれません。あなたは本当に救われていますか。確信が持てないという人は、今晚がチャンスです。もちろん私は皆さんが救われていると思っています。でも、ちょっとでも疑いを感じていたならば、その疑いをすべて今晚中に消し去って、そしてあなたの中には絶対的な確信しかない、私は確かに救われている、間違いない、私は神の子供であると。私は罪赦された者。何も恐れなくて良い。天国に行くだけだと。その確信を持って、平安を持って、喜びを持ってこの時間をあとにして頂きたいので、救いを確かなものとする。召されたことと選ばれたことを確かなものとする。その作業は是非今晚して頂きたいと思います。万が一にも自分は召されていない、選ばれていなかった、つまり救われていなかったというふうに神様からハッキリと示されたならば、まだ魔術師シモンのように名ばかりのクリスチャンであって本当の意味で救いは知らなかった、経験していなかったと言うならば、神はご存知です。私はそれを皆さんに告げることは出来ませんし、私が判断することではありません。それは主とあなたの間で分かることです。ですから是非、万が一にも救われてなければ、救われているつもりでそのままの日に天国に行けると思っていたのに地獄に落ちちゃったみたいなことにならないように、今晚中に解決をして頂きたいと思います。救いを

自分のものとして頂きたいと思います。でも、そういう人は多分いないと思うので、少なくとも救いを確かなものとして、盤石なものとして、もっともっと確信を持てば他の人にも確信を持ってあなたの救いの喜びを伝えることが出来ると思うんです。自分の救いが不確かだから、中々自身を持って大胆に胸を張って伝えられないのかもしれないです。でも、自信と言うか確信があるならば、反対されようと、馬鹿にされようと、迫害されようと、きっとあなたは自分の救いを大胆に誰に対しても顔色も見ずに語り、そして語り続けることが出来ると思います。素晴らしい効果があるんです。救いの確信を毎回毎回リニューアルしていく。今晚よりも明日、明日よりも明後日、もっともっと確信に至っていく。これは深まるものです。これは強まるものです。これは高まるものです。ですから、その作業は怠ってはいけません。今晚を機にこれからもずっとその作業を続けて下さい。召されたことと選ばれたことを確かなものにする。その作業を毎回のバイブルスタディーでやってみて下さい。毎回聖書を開く度に確認してみてください。天国に行くまで、このことは続けられるべきなんです。同時にサタンはあなたの救いを疑わせようと、確信を揺るがそうと躍起になっています。惑わされてはいけません。騙されてはいけません。羊の皮を被った狼たちが、あなたにささやくかもしれません。いろんな教えがいろんな媒体を通して、インターネットを通じて、書物を通じて、何らかの音声を通じて、人を媒介としてあなたのもとに届けられ、そしてあなたはそれで惑わされる。それで戸惑うかもしれません。でも、そういうことが無いように、その時にはしっかりとブレないように、確信を持てるように、今からそのことを皆さんにも始めて頂きたいと思います。では、今晚はこれで一旦閉じさせて頂きますので、このあと祈りと聖餐式の時間に、またその救いの確信を確かなものとする時間を設けたいと思いますので、その時皆さんチャンスですから、いつかそうするんじゃないくて、今晚もうこのことをスタートして下さい。では、一旦これで閉じます。